



『萬葉集』における動詞の表記 (資料編・下)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 夏井, 邦男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003477

『萬葉集』における動詞の表記（資料編・下）

夏井邦男

一

小稿は、『萬葉集』における動詞の表記（資料編・上）に続くものである。^{（註1）}まず、動詞のク語法の語尾表記については、その特徴をおよそ次のようにまとめることができるであろう。

正訓及び仮名書きの諸例を通して（久）字が一般的であること。形容詞の場合には、（口）字が頻用されていることについては既に指摘した^{（註2）}ところであるが、この動詞では（言續來口）へ一三・三二五五が孤例であり、両者の書き分けの事実として把えられる。これは、（口）字がそもそも動詞の活用語尾にはほとんど用いられないことがないことと無縁ではないだろう。

〔苦〕字がまれに〔君乎思苦〕へ二一・三二八九一云や〔吾戀苦波〕へ八・一四四九などのように用いられることもあるが、これらは〔積而戀良苦〕へ四・六九四や〔妻尔戀樂苦〕へ八・一六〇九などと同様に、戲書的な要素を多分に含んだ表記である。この〔苦〕字は、形容詞の場合にも〔言繁苦〕へ一一・二七二八などのようにみられるのであるが、こちらは孤例であり、この種

のものも極めて少ない。また、〔見九四與四門〕へ八・一四二一などにもみられる（九）字も、数字を意識的に配列しようとしたものである。いずれも使用頻度の低い仮名が用いられる場合の理由のひとつになっている。

総じて、動詞のク語法の語尾表記に用いられる仮名の種類は、形容詞に比べて複雑である。このことは、「形容詞のク語法が相對的に古い」^{（註3）}こと、従って固定化した限られた言い方でしかみられないことに関係があるだろう。ク語法の構成する型が類型化したこととその表記の固定化とは、密接な関係^{（註4）}にあることも知られるのである。

活用語尾が二音節以上訓み添えられる例を抜き出してみると次の通りである。

- 隠^⑦へ九・一六九一　○還^⑧へ四・六三一　○聞^⑨へ四・五三一　一〇・二二三　○落^⑩へ一〇・二〇九四
- 沾^⑪へ九・一六九七　○零^⑫へ一〇・一九六三　二一・三
- 五　一・三二二　○御覽^⑬へ六・九三八　○戀^⑭へ四・五二六　一一・二四四三　一二・三〇八七　一三・三二四四　三三・〇二二　○眷^⑮へ一一・二四八一　○晚^⑯へ一

二・二九二二〇見②(シ)へ七・一二四七

右の用例を通して、いわゆる作者年代不明の歌であるとか、人麻呂歌集など古い歌に多いことが知られる。巻で言えば、形容詞の場合にはおよそ八・九・十一・十二の巻に限られているから、この動詞に少し広がりを見ることができるのである。

周知のように、集中では二音節の仮名が省筆されるのは稀なことであるが、二音節が無表記であってもほぼ確実にク語法で訓まれる例は少なくはない。むしろ諸本間で異訓を生じているものが意外に少ない。今、『校本萬葉集』の校異によりそれらに注目してみる。

(イ)〔還④念者〕へ四・六三二には、「カヘラスオモヘハ」へ萬葉代匠記精撰本、「カヘスオモヘハ」へ萬葉集略解、「カヘシ、モヘバ」へ萬葉集古義などの訓みがあり、

(ロ)〔聞④師吉毛〕へ一〇・二二二二には、「キカシシヨシモ」へ萬葉集玉小琴などの訓みがあり、

(ハ)〔令盡④念者〕へ四・六九二には、「ツクスオモヘバ」へ略解、「ツクセルモヘバ」へ古義などの訓みがある。

右のような諸本間にみられる訓みのゆれに共通することは、いわゆる連体法であり、当時これがク語法と表現価値が近いと解されやすかったことが理解される。語法と表記との関連性の問題として注目してよいだろう。

二

言うまでもなく、現代ではある語に当てる使用漢字は、原則として一種類に固定する傾向がある。集中においても、常用の漢字が固

定している動詞もあるが、語によっては二種類の正訓字が張り合った状態で見られることも特徴的である。たとえば、

○カハル〔更〕と〔易〕、○クラス〔暮〕と〔晩〕、○チル〔散〕と〔落〕、○ツクル〔作〕と〔造〕、○トヨム〔響〕と〔動〕、○マク〔巻〕と〔纏〕、○ユク〔行〕と〔去〕、○ヨブ〔喚〕と〔呼〕

などは、そうした非固定的なものの代表である。また、

○オモフ〔念〕、○イフ〔云〕、○フル〔落〕と〔零〕、○サク〔開〕

などのように、現在一般的ではない文字がかえって頻度が高い傾向にあるものもある。^(註5)

こうした表記についての考察も、当然のことながら巻による片寄りが見られるだろうし、戯書や義訓に代表されるように個人の自由になる文字使用の領域がきわめて広いことから、個人差の問題などと絡めて体系的になされなければならないのであるが、ここでは二・三の具体例を取り上げて問題を提示するにとどめる。

集中、〔咲〕字は、「サク」とも「エム」とも訓まれるのであるが、「サク」の正訓字には先にも示したように〔開〕^(註6)などがある。一方、この「開」字は「アク」とも「ヒラク」なども訓まれるから、これは書き分けられない文字として考えられる。『萬葉集』を読む側からすれば、こうした活用語尾を表記することなくある仮名をいくつかの語にわたって読ませる文字の体系も明らかにされてよいであろう。

更には、たとえば〔言借〕を動詞「いぶか」^①へ九・一七五三とも、形容詞「いぶか」^②へ四・六四八とも訓ませるように二つの品詞にわたった表記も少なくはない。こうした派生という言語現象が表記とどのような関係を持つかという問題についても、名詞や

形容動詞の表記との絡みもあり別稿に譲る。

巻一や巻二には、本文のあとに異同のある或本の歌を載せているが、たとえばへ一・二五の本歌では〔兩者零計類〕とあるのに対して、へ一・二六の歌には〔兩者落等言〕などのように、句の相違だけではなく文字の違いにまで編者の意識がおよんでいるように考えられる。瀬古確氏によれば、「巻一・巻二の編者が本文と或本歌とを万葉集に収録するに当ってそれぞれ違った表記を意識的に行ったものではないか」と推測されている。ここには、本文に採用された文字と或本又は一云などに採られた文字とがどんな関係にあるのかといった問題も潜んでいるのである。

三

『観智院本類聚名義抄』には、「オモフ」と訓まれる漢字がおよそ六十六字みられる。集中では、〔想〕や〔憶〕は主として巻十二に片寄って用いられているだけであり、歌にふさわしい文字として〔念〕字、次いで〔思〕字が選ばれたのだろう。これは、ジャンルによって文字が選ばれ固定している場合のひとつである。

更には、「大夫とおもへる我も〔や〕」というような句には、巻を越えて〔念〕字が用いられているから、ここにも厳密な用字の選択がなされているのを知ることができる。いわゆる慣用句としての言い方と表記との関連性についても問題となるだろう。

『注釋』や『岩波大系本』に〔思空〕へ八・二五二〇とあるのは、『類聚古集』『紀州本』『温故堂本』によって改訂したものであり、『校本萬葉集』の本文には〔意空〕とある。集中、〔意〕字は、
○意毛比へ一七・三九〇五　○意母比へ五・八八六　○意母

布へ五・八四五　○意母布度知へ五・八二〇　○意母閉へ五・

八〇五　○意母保由へ五・八〇二　○意母保由留へ五・九〇

三

などのように、「オモフ」の「オ」の仮名として用いられている。恐らくは、本文の転写の過程で〔思〕字が〔意〕字に改変されてしまったのは、右の用例にみられるように〔意〕字が表意性を多分に含んだものであることにも起因するのだろう。

いわゆる本文批判ということが、表記の研究において重要な一部門であることも言うまでもない。『新撰萬葉集』では、伝本間で「助詞・助動詞・動詞などの活用語尾の表記が甚だしく相違している」ことの指摘がなされている。この『萬葉集』の場合にも、活用語尾の記されている用例が諸本間でどの程度の異同があるのか校合されなければならない。

そして、このことは「巻一・巻二の古歌の文字面が…〔中略〕…テニヲハのはしはしまで綿密に書きとめられているのは、人麻呂時代に獲得された技術を応用して、それぞれの巻の編纂者が編纂時に記定したからであろう」という根本的な問題と絡めて追求されなければならないだろう。

初期の表記の綿密さと後期のそれとは近似性が認められるのかどうか、といった活用語尾の表記の考察も記述者とか編纂の問題にまで発展する。

この動詞表記の一覧表が、以上のような諸問題を解きほぐす手懸りに資するところがあれば幸である。

(昭和六十二年八月九日稿)

註

- (1) 『北海道教育大学紀要・第三十七卷第二号』(昭和六十二年三月)
- (2) 拙稿「萬葉集の形容詞語尾の表記について」(『函館国語・第二号』一九八六年十一月)
- (3) 井手至氏の「萬葉集のク語法」(『人文研究・一六ノ三』)参照。
- (4) 橋本四郎氏の「ク語法とその周辺」(『論集日本文学・日本語1上代』所収)によれば、集中においてもク語法の構成する型が、「語単位に見れば、…(中略)：特定の型に集中するものが多いという傾向が著しい」ことの指摘がなされている。このことは、表記上からも確かめられる。たとえば、形容詞ク語法で主流を占める「雲」字は、動詞では「言雲知久」(四・六一九)や「有雲知之」(三・二五八)などにしかみられず、それも形容詞の述定の対象に位置するような熟した言い方にみられることも傍証となるだろう。
- (5) 『時代別国語大辞典 上代編』の「上代語概論・第二章 文字および音韻」には、「現在普通でないものがかえって頻度が高い傾向にある」ものとして、「念・零・開・落」が挙げられている。しかし、管見では「散」と「落」とはほぼ同数の張り合った状態で用いられている。
- (6) 集中における「開」字と「咲」字との使い分けについては、渡部和雄氏に「萬葉集における「咲」字」(『長崎大学教育学部人文科学研究報告・第二十一号』)と題した論がある。
- (7) 「萬葉集卷一・卷二の用字」(『フェリス女学院大学紀要・三』所収)参照。
- (8) 白川静氏の『文字遣遣』(第三章 漢字古訓抄)によれば、『古事記』では「思ふ」が過半数を占めることから、やはり散文では「思」、歌では「念」が多く用いられているという。ちなみに、この傾向は『日本書紀』ではほぼ「思」3に対して「念」1の割合になっているから、『古事記』の用字の伝統を受け継いだものと言うことができる。
- (9) 「意」字が「オモフ」の「オ」の仮名として用いられるのは、巻十七にみられる一例を除きすべて巻五である。また、「意」字が「オ」の仮名として動詞の表記に用いられるのも管見では巻十七のほかには巻十九であり、ごく限られた巻にしかみられない特徴的な仮名である。巻五と巻十九の用字の類似性については、筆者も「萬葉集における動詞の表記について」(『国語研究・第四十九号』)で指摘したことがある。
- (10) 武田祐吉氏の『萬葉集校定の研究』(第三章 萬葉集の伝来)によれば、「訓が同じであることによって、しばしば異文発生の原因となつてゐる」という。
- (11) 高野平氏『新撰萬葉集に関する基礎的研究』の「資料篇第三章 各伝本の性格考察」参照。
- (12) 稲岡耕二氏の『萬葉集の作品と方法』の「序章 口誦から記載へ」参照。

(本学教授 函館分校)

『萬葉集』における動詞の表記

							下二段活用																
							語																
							表記(用例数)																
							巻																
7	6	5	4				3	2	1														
あはす	あす	あけまく	あぐ				あく	あく	あきらむ														
安波勢	浅	開設	舉	上	曉	旭	開	明	明流	安久流	安家	安氣	開	阿氣	安氣	明米	明良米	明良牟流	安伎良目	安伎良米	安吉良米		
①	②	①	③	⑤	②	②	①	②	①	①	①	①	①	①	②	②	①	①	①	①	②	②	
十九	三・六	四	十・十六	七・八・十一・十六	十一・十九	十一・十三	⑤	十二・十三	二・三・九・十・十一・十二	四	十五	十四	④	十二	六・八・十・十一・十二	十一	四	十七・二十	三・十九	十九	十九	十九・二十	十七・十八

								語																	
								表記(用例数)																	
								巻																	
16	15	14				13	12	11	10	9	8														
いづ	いさむ	ある				ある	ありなくさむ	あらはる	あゆ	あふ	あふ														
伊豆	伊泥	禁	生	安礼	阿礼	有	荒	安礼	有名草目	有名草目	所顯	顯	安由流	阿要	安要	肯	堪	敢	安倍	相	安倍	令相	令逾	安波世	
⑤	⑨	①	③	②	②	①	③	④	①	①	①	①	①	①	①	②	③	④	④	①	④	①	①	①	
五・十五・二十	十七・十八・十九・二十	十六	九	三・四	一・六	一・六	十	二・七	十三	一・二・三・六・十	①	②	③	④	④	④	④	④	④	④	④	④	④	④	④

20	19	18	17																			
います いひつつ		いばゆ	いぬ																			
伊座	坐	伊麻勢	云傳	嘶	鳴	稻	寢	寐宿	寐	宿	伊努礼	山上復有山	乞	乞	出	出流	伊豆流	伊壱	伊田	伊氏	伊低	
⑦②	⑧①	①	⑦①	⑤①	⑤①	⑥①	⑥①	⑥②	⑥⑥	⑥⑫	①	⑦①	⑦①	⑦⑤	⑦④	⑦⑧⑩	④	①	①	①	③	③
二・三	三	十五	⑤	十三	十三	十一	二	四・八	十三	四・九・十一・十二・	四・七・十・十一・十二	二十	九	八	八・十・十二	三・七・⑤⑩・十六	十三・十六・⑦⑩・十九	八・九・十・十一・十二・	二・三・四・⑤・六・七・	三・十二・十六	十四	十四・十五

32	31	30	29	28 27				26		25			24	23	22	21										
うく	うく	うく	うかる	うかぶ				うう		うう		う			いる	いりいづ	いやたつ									
宇既	受例	受	泛	浮	得干	浮	浮倍	有可倍	于可倍	飢	植	殖	宇々流	宇惠	得	宇流	愛	依	衣	入	伊礼	入出	所射	伊夜多豆	座	
①	①	②	③	③	①	③	①	①	②	①	④	③	①	⑦	③	①	①	①	⑥	①	①	①	①	①	③	
五	十六	十六	八・十	一・二・七・十	十一	八・⑩⑨	一	五	五	⑤	八・十一・⑩⑨	三・四・八・九・十・十二	十五	十五・十七・十八・二十	十三・⑩⑨	二・三・七・九・十一・	十五	五	二十	①・十四・十五	二	十五	九	十六	十八	二・四・十二

『萬葉集』における動詞の表記

45	44	43	42		41		40	39	38		37	36	35		34	33										
おくまく	えす	うれふ	うるたふ		うらぶる		うらなく	うらがる	うまる		うつつ	うつ	うする		うす	うけすう										
奥儲	江須流	憂	訴	浦乾	浦乾	裏觸	浦觸	浦觸	浦嘆	裏歎	ト歎	宇良奈氣	宇良賀礼	所生	産礼	打棄	宇都互	棄	薄	減		失	浮居	宇氣須惠		
ケ	ヒ	ヒ	ヒ	ル	レ	レ	レ	ケ	ケ	ケ	ケ	レ	レ	ヅ	ヅ	テ	テ	レ	レ	セ	ス	ス	セ	エ	セ	
①	①	②	①	①	②	④	⑤	③	①	①	①	①	②	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	③	
十一	二十	⑤	十六	十一	十一	十一	七・十・十三	七・十・十一・十二	五・十七・十九	十	十	一	十七	十四	九・十一	五	十一	十一	五	十三	十一	九	十一	二	七・九・十二・十九	十七・二十
																									卷	

58	57	56		55	54	53	52	51		50		49		48		47	46									
おもひかぬ	おもひあふ	おもはふ		おほす	おふす	おびゆ	おとろふ	おしふす		おしなぶ		おさふ		おこす		おくる	おくまふ									
於毛比可祢	念(一)堪	於母波弊		負	於保世	於不世	協流	衰	押伏	押靡	押奈戸	於之奈倍	抑	抑	於佐倍	所來	於已勢	於許世	所遺	遺	所贈	後	於久礼	奥真經	奥真經	
③	①	①		②	③	①	①	①	①	⑤	①	①	①	②	①	②	①	①	①	①	②	⑫	⑨	①	②	
十四・十五	六	二十		三・十六	十四・十八・二十	二十	二	十二	十一	一・六・八・十	一	十七	六	三・十三	二十	十六	十九	十八	十二	十二	二	四・十二	十三・十九	四・六・八・九・十二・十七	五・九・十四・十五	六
																									卷	

60		59		語	表記(用例数)	卷
		おもほゆ	おもひたゆ			
念	思	所思		於母比可祢	②	十四・二十
②	①	①		念不得	②	十一
				思兼	①	十二
				於毛比多要	①	十五
				念絶	①	四
				於毛保要	②	十七
				於毛保要	①	十七
				於毛保由	⑦	十四・十五・十七・十八・
				於母保由	②	二十
				意母保由	①	五・十八
				於母保遊	①	五
				於毛保由流	④	十六
				於母保由流	③	十五・十八・二十
				意母保由留	①	十七・十八
				所念	⑩	五
					②	二・四・六・七・九・
					④	十一・十九
					③	一・二・三・六・七・八・
					②	九・十・十一・十二・
					③	十三・十六
					③	三・四・六・七・八・九・
					③	十・十一・十二・十六・
					①	七
					②	十八・十一・十三・十九
					③	六・十一
					①	十一
					②	十一

71	70	69	68	67	66		65		64		63		62		61		語	表記(用例数)	卷		
かぞふ	かさぬ	かぐる	かくる	かく	かく	かきつく	かきる	かきなぐ	かかぐ	おろすう											
可蘇倍	可俗閉	重	累	可佐祢	香具礼	匿	可久礼	闕	掛	繫	懸	懸流	賀氣	加氣	可家	可氣	書付	搔入	可伎奈氣	搔上	於呂須惠
①	①	③	⑤	③	①	①	②	①	①	①	①	①	①	①	①	⑧	①	①	①	①	①
十八	五	十二	五・十・十六・十九	十八・二十	九	七	十四	十三	四	六	七	十	十六・十九	八・九・十・十二・十三・	一・二・三・四・六・七・	七	七	二	九	七	二十

『萬葉集』における動詞の表記

78		77		76 75 74			73 72		語																		
かぬ		かづく		かつ	かたむ	かたぬ かたまぐ																					
兼	可奴	加祢	潜	瀆	可頭氣	難	勝	可都	可氏	可天	我氏	我豆	迦豆	可提	加豆	語左氣	可多米	方貯	片任	方設	片設	加多麻氣	可多祢	數	竿	表記(用例数)	卷
⑤	②	①	①	①	①	②	⑦	①	①	①	①	①	①	②	④	①	①	①	①	②	②	②	①	①	①		
四・六・十二	十四	十四	十九	十三	十九	七	二・三・四・七・九・十・十一・十二	十四	十九	十四	十四	五	五	十四	五・二十	十九	十四	十三	十一	十	二・十	五・十五	十八	八	十三		

86	85		84	83		82	81	80		79	語																
かる	かる		かる	かりそく		かまふ	かまく	かふ		かぬ																	
可例	干	涸	可例	枯	干	可礼	苜除	苜除會氣	可利會氣	構	蚊間毛	更	替	易	可倍	兼	金	不()	不勝	不得	迦祢	我祢	加祢	可祢	表記(用例数)	卷	
①	①	①	①	②	②	②	①	①	①	①	①	①	②	⑦	①	④	⑥	①	①	①	③	③	④	④			①
⑫	十	十六	五	十・十六	三	十八	十一	十六	十四	九	⑫	四	三・七	二・四・十・十一・十二	③	一・二・四・十二	十一・十二・十三・十六	二・三・四・七・九・十	三	十二	三・八・九・十・十一	十二・⑫	二・三・七・十・十一	五	十四	①・五・⑫	①

90	89	88	87	語	表記(用例数)	卷
きす	きえうす	きかさぬ	きこゆ	可礼	⑨	九・十一・十五・十七・十九・二十
				可流	①	十四
				可流類	①	十一
				加流々	①	十九
				離	④	三・九・十一
				不數見	①	六
				不數	①	十二
				干	①	十二
				疎	①	十一
				消失	①	九
				伎可佐祢	①	二十
				吉許延	①	五
				伎許要	①	十八
				伎已要	①	十九
				伎許由	②	十四・十五
				所聞	⑦	一・二・七・八・十二・十三・十六
				聞	①	九
				所聽	④	九・十・十二
				所聆	①	十
				伎世	②	六
				吉西	①	五・十五
				枳世	①	十四
				著	②	四・七

99	98	97	96	95	94	93	92	91	語	表記(用例数)	卷
くだく	きよす	きよむ	きよむ	きゆ	きはむ	きはむ	きはなる	きなる	令服	②	七・十
									服	①	九
									著穢	①	三
									伎波奈礼	①	十七
									伎波奈例	①	二十
									伎波米	①	二十
									吉倍	①	五
									伎倍	①	十五
									岐布	①	五
									寸經	①	十二
									消流	②	十二
									消	③	九・十二・十九
									削	①	九
									來縁流	①	六
									來依留	①	七
									來縁	①	十一
									來依	①	十三
									伎欲米	①	二十
									氣	③	五・十七・二十
									家	①	四
									既	①	五
									久	①	十七
									消	④	二・三・四・七・八・十・十一・十二・十三・十九
									銷	①	九
									摧	③	四・九・十二
									碎	①	十六

『萬葉集』における動詞の表記

140	139	138	137	136	135	134	133	132	131	130																	
しむ	しむ	しむ	しまがくる	しはぶる	しなゆ	しづむ	したはふ	したこがる	さゆ	さふ		語															
之米	標之米	染之米	之麻我久礼	之波夫礼	之妻	志妻	之奈要	静	鎮目	斯豆迷	下延	之多波布流	之多波倍	之多婆倍	下粉枯	左叡	障	塞	禁	佐弁	紗眠	左宿	左(宿)	佐(寐)	佐奴礼	左奴流	表記(用例数)
④	⑥	①	①	①	①	①	②	①	①	①	②	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	③
五・十五・十七・二十	七・八・ <u>十九</u>	十九	三	十五	十七	二	二	⊖・⊕	十一	二	五	九	十八	二十	十四	十一	⓪	十一	十三	四	二十	十一	六	十一	二	十五	十四・十五
																										卷	

149	148	147	146	145	144	143	142	141																				
せむ	せかふ	すりつく	すつ	すう	しをる	しる	しらす	しらく				語																
責	勢米	塞耐	塞敢	摺著	須里都氣	乘	須都	須底	座	坐	居	須惠	之乎礼	所知	知	知	令知	知	知	志良世	白斑	白髮	令	思馬	之賣	志米	表記(用例数)	
①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	⑦	⑦	①	①	①	①	②	①	②	①	①	①	①	①	①	②	②	
十一	五	十一	七	七	十七	十一	五	十九	十三	三	三・六・十一・十三	十九・二十	⊖・十四・十五・十七	十九	十六	十三	八・十三	十一	四・十三	二十	九	四	十二・十三・ <u>十九</u>	二・三・四・八・十一	十四	十四	十四	十四
																										卷		

159	158	157	156	155	154	153	152	151	150											
たつ	たちさかゆ	たすく	たぐ	たく	たがぬ	そむ	そむ	そふ	そなふ	語										
立流	多豆	多須氣	多宜	多具	斜	多何祿	始	會無	會米	染	染流	會米	副	副流	會倍	蘇倍	供養	迫		
①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	表記(用例数)
①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	卷
十八	十八	十九	十七・十八	十四	五・十五・十八・二十	七	十一	四・六・七・八・十・十一・十二	十九	十四・十八	三・七・十・十六・十九	七	二十	二・十・十六	十一	十八・二十	十	六	十一	

168	167	166	165	164	163	162	161	160	161	160														
たゆ	たむく	たむ	たまふ	たぶる	たひらぐ	たはる	たはぶる	たのむ	たとふ	たづぬ	語													
多由	多延	多要	手向	多米	多麻布礼	多麻倍	多夫礼	平	多比良氣	多比良宜	多波礼	戲礼	憑	恃	令憑	令恃	多能米	警	尋	多頭祿	多豆祿	立		
②	⑬	⑫	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②	④	⑦
②	⑬	⑫	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	②	④	③
十四	二十	五・十四・十五・十七	六	⑬	十五	十四	十七	⑬	十七	五	⑨	五	十二	十一	四	四	十四	三	九・十九	十九	二十	一・七・十六・十九	一・二・三・六・七・九・十・十一・十二・十三・十六・十九	一・二・三・六・七・九・十・十一・十二・十三・十六・十九

173 172	171 170 169	
つかぬ つかふ	たわする づ	たる
多由流 絶	手忘 低 氏 提 泥 豆 堊 豆 出	垂 斷
表記(用例数)		
① ② ③ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺		
卷		

177	176	175	174	
つつ	つぐ	つく	つかる	
都氏	都氣 都号 都宜 追氣 都具 都具礼 告礼 告	著 都祢 都氣 羸 勞 疲	仕流 仕流 奉仕流 奉流	
表記(用例数)				
① ② ③ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺				
卷				

188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178		
	ととのふ	とぐ	とく	ときさく	ときかふ	とがむ	つらなる	つむ	つとむ	つどふ	つつく	語
調流	登々能倍	登々能倍	等登能倍	等登能倍	等登能倍	等登能倍	等登能倍	等登能倍	等登能倍	等登能倍	等登能倍	表記(用例数)
①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	卷
三	二	二十	十九・二十	三・四・七	十二	二・九・十一・十二	十四	十九	十二	四	五	十三

195	194	193	192	191	190	189	
とよむ	ともなふ	ともしむ	とむ	とむ	となふ	とどむ	語
等余米	等毛奈倍	等母奈倍	等母奈倍	等母奈倍	等母奈倍	等母奈倍	表記(用例数)
①	①	①	①	①	①	①	卷
十五	十七・十八	十五・十八・十九	十九	十九	十一	十八	十

216 215 214				213 212				211 210				209 208											
ぬ				なる				なむ				なびく											
にほふ				ならぶ				なぶ				なぶ											
にほゆ																							
宿	奴礼	奴流	年	祢	尔太要	丹穗所經 —(フレ)	狎	穢	奈流留	奈礼	奈良倍	那良敵	屯	雙	副	數	並	奈米	名目	奈倍	靡	名倍	靡
(ネ)	④	⑥	①	②⑤	①	①	①	②	③	①	⑤	①	①	①	①	①	⑨	①	②	①	①	①	②
④⑨	④	⑥	①	②⑤	①	①	①	②	③	①	⑤	①	①	①	①	①	⑨	①	②	①	①	①	②
一・二・三・四・六・七・	十四・十五	十四・十五	十四	五・十四・十五・十七・	十九	十六	十二	十一・十二	三・七・十一	十四	十八	十四	九	七	一	一	十三・十七・十八	一・三・六・七・十・	十七	六	十四	九	十一
											⑥・⑨・⑫・十五・												
表記(用例数)																							
巻																							

219 218 217																						
ぬる																						
ぬひつく																						
ぬきつ																						
所漬	所霑	所湿	所濡	所沾	濃礼	奴例	奴礼	縫着	脱都流	所寐	睡	眠	寐	寐	寐	寐	寐	寐	寐	寐	寐	
①	①	①	①	②⑤	①	②	⑨	①	①	①	④	②	①	①	③	①	①	①	①	①	①	
①	①	①	①	②⑤	①	②	⑨	①	①	①	④	②	①	①	③	①	①	①	①	①	①	
十二	二	一	九	十一・十二・十三	二・四・六・七・八・九・	十・十一・十二・十六	二・四・六・七・八・九・	十九	五	十四・十五・十七・二十	十六	五	十一	十三	十三	十三	十四	十三	一・十・十一	二	十一	二・七・八・九・十・
表記(用例数)																						
巻																						

『萬葉集』における動詞の表記

229	228	227	226	225	224	223	222	221	220																	
はつ	はじむ	はさす	はささぐ	はく	はかる	のぼす	のぶ	ねぎむ	ぬる																	
極	竟	泊	泊流	波都流	波底	波豆	始	波自米	波佐世	波佐氣	著	波氣	波久例	波可礼	浜須	暢	延	述	宿覺	奴留	奴流	奴礼	閏	霑	潤	
③	①	③	③	③	①	①	④	④	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	③	③	①	①	①	①
九・十	十一	七・十	六・七・十九	二・三・五・七・九・十	二	十五	十七・十九	十五・二十	一・八・十・十三	十八・二十	十四	十四	七	二十	一	十九	十九	十	十九	十四	十四	七	三	三	三	三

241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230																	
ひならぶ	ひづ	ひきとどむ	ひきうう	はる	はる	はらふ	はゆ	はむ	はふ	はぬ	はなる																	
日(一)並	比奈良倍	秀	比伎等騰米	引植	比伎宇惠	晴	晴	腫	腫	掃	波良倍	波由流	伴要	波米	蠅	延	令蔓	波布	波敞	播倍	波倍	波祢	放	波奈例	波奈礼	湊	矣	盡
①	①	②	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	③	①	②	①	①	③	②	②	②	⑥	①	①	①
六	二十	七・十	二十	十八	十八	八	十六	十七	十七	十四	十四	十七	四	七・十・十九	十二	十九	十四	十四	五	八・十四・十七	五	二・十一	五・二十	十四・十五・十七・二十	六	十六	七	

245			244			243			242										
ふく			ふかむ			ふ			ひらく										
降	更降		深	布氣	深	深目	布可米	經過	歴	經	經流	布流	布	敞	倍	開	日位		
①	①	②	③	⑥	①	⑩	①	(一)	(一)	(一)	①	①	②	①	⑭	①	①		
十	八	十三	二・三・六・七・九・十・十一・十二・十三・ <u>十九</u>	二十 十四・十五・十七・十九・	十一	十二・十三・十六	二・三・四・七・十一・十八	十二	四・六・十・十二・十三・ <u>十七</u>	十・十一・十二・十三・ <u>十七</u> ・ <u>十九</u>	一・三・四・七・八・九・十・十一・十二・十三・	十八	十三	十五	十八・二十	十五	十五・十七・十八・二十	八	十一

253			252			251			250		249		248		247		246											
へだつ			ふる			ふりさく			ふらばふ		ふみたひらく		ふみたつ		ふす		ふくる											
敞太豆	敞太豆		觸	經	敷札	布札	振離	振仰	振放	振酒	振左氣	布利左氣	布利佐氣	布里佐氣	觸經	敷美多比良氣	躑立	履立	布美立	布美多氏	伏	布久札	更深	闌				
①	②	⑦	②	⑩	②	①	①	②	①	①	②	②	②	③	①	①	①	①	①	①	②	①	①	①	①			
十八	十八	四・七・八・十	四・九・十・十一・十三	四・十二	十一・十二	十二	十七	十四・二十	三	六・十一	<u>十九</u>	二・三・十・十一・十三・十三	十三	十三・十九	十八・十九	十七・二十	十五・十七	十七・二十	十七	二	十七	六	三	十九	十七	四・十一	十二	十二

『萬葉集』における動詞の表記

268	267	266	265		264	263		262	261	260		259	258	257	256		255		254								
みさく	まるづ	まぬかる	まつろふ		まじふ	まぐ		まく	まく	まく		まかりづ	まがふ	まかす	まうく		ほゆ		ほむ								
見放	見左久流	参出	麻爲泥	免	麻都呂倍	雑	交	麻自倍	麻宜	儲	設	負	任	去出	退出	乱	委	麻宇氣	叫吼	吠	誉	宝米		間	阻	隔	
①	①	①	①	①	①	①	③	①	①	②	③	①	①	①	③	①	①	①	①	①	①	①	①	③	②	②	⑥
一	十九	六	十八	三	十八	十	三・十・十九	十八	五	七・九	四・八・十二	九	二	三	三・七・十一	八	二	十八	二	十三	四	二十	七	七・十一	十一	十・十九	四・十・十一・十九
																											巻

274	273	272			271	270															269									
みやつかふ	みつる	みつ			みだる	みだゆ															みす									
宵	宮仕	三礼	見津礼	美豆			亂	美太流々	美多礼	美太礼	美太要	見	所見	令観	令(見)	令視	令視	令見	見勢	見世	弥世	弥西	美世	美勢						
①	①	②	①	①	①	③	①	①	①	⑤	①	①	①	②	①	①	④	①	①	④	①	①	①	②						
十六	六	四・十	④	十八	十二	十・十二	十九	十・十一・十二・十三	二・三・四・七・八・九	十七	十五	十四・十五・十七	十四	十三	十六	八	十	二	十・十一	九	三・八・九・十・十三	十五	①	④	①	①	十七	十七	五	十七・十九
																											巻			

286	285	284	283		282	281	280	279		278	277	276			275											
もつ	めならぶ	めづ	めさぐ		むる	むなわく	むすばる	むす		むく	むかふ	みわする			みゆ											
母天	眼(並)	米位	咩佐互	群	集	牟札	牟奈和氣	牟須保札	咽	牟氣	无氣	武氣	迎	見遣	三湯流	美由流	見由流	三湯	美由	見由	美曳	民延	見延	見要	美延	美要
①	①	①	①	①	①	①	①	①	②	①	①	①	②	①	①	④	⑥	①	③	⑨	①	①	④	⑥	⑥	⑦
十八	七	十五	五	二	九	十九	二十	十八	三・四	二十	十九	五	六・八	十一	十四	十四・十五・十七・十八	十四・十五・十七・十八	四	五・十七	三・十四・十五・十七	二十	十九	十四・十五・十七	十四・十七・十八・十九	五・十五	十四・十五・十七・二十

		291		290		289				288				287															
		やす		やく		もゆ				もゆ				もとむ															
瘦	夜須	夜勢		所燒	夜氣	目生	毛要	毛延	燃	所燎	燒	燎	燒流	燎留	燎流	毛要	母要	母延	寬		求	求流	物得米	母等米	毛等米				
④	②	①		①	①	③	①	②	①	①	③	②	①	①	②	①	①	①	①	①	⑦	①	①	①	①				
二・四・七・十二	八・二十	十五		五	三	十七	十	⑩	⑩	十七	二	十一	九	二・三	四・十二	十二	十	二	十七	十七	五	七	十三	三・六・九・十・十二	二・四・七・十三	十二	十四	十七	五

『萬葉集』における動詞の表記

語	表記(用例数)	卷
やすむ	①	四
夜周米	①	五
夜須米	①	十七
安目	①	十二
安	①	七
破	②	七・十三
結垂	①	十三
由比都氣	①	十五
弛	①	十一
与世	⑦	十四・十五・十七・十八・二十
余勢	②	十七・十八
与勢	①	十五
余須	②	十四
与須流	⑤	十五・十七・十九
餘須流	②	十七・十八
余須流	①	十七
与須礼	②	十四・二十
縁流	③	三・八・十三
依流	③	七・十二
因流	①	四
依	⑤	二・七・九・十一
縁	④	十一・十三
縁	④	三・十一
縁	②	十一・十三
縁	⑧	四・七・九・十一
縁	④	四・七

語	表記(用例数)	卷
よそふ	①	三
よりぬ	①	十四
わかる	①	十五・十七・十八・二十
寄	①	十三
所依	①	四
因	③	四・七
所縁	②	十一
令依	①	七
所因	①	十
与會倍	①	⑧
世副流	①	十一
与副	①	十
余里祿	①	十四
依宿	②	二・十二
和可礼	④	十五・十七・十八・二十
和加礼	①	五
和我礼	①	十九
和加例	①	二十
和可例	①	二十
和可留	①	五
和可流	①	二十
別	②	二・三・五・八・九・十・十一・十二・十三・十七・十九
分	④	四・十九
和氣	①	三
別	②	二・十
和須礼	①	五・十四・十五・十七

307	306			305	304	303	
をふ	をさむ			るぬ	わわく	わる	語
終 平布流 遠敵 乎倍 取 蔵	治	乎佐牟流	遠佐米	乎佐米	乎左米	率宿 爲祢	和々氣 破 遣 遺 遺 遺 遺 遺
② ① ① ① ① ②	⑤ ① ① ① ①	① ① ① ① ①	① ① ① ①	② ②	①	② ② ④ ⑦	忘 忘礼 和須流礼 和須例
二・十 十四 十四 五 六 九・十六 ①九 二・九・十三・①八 十七 十七 十七 十七 十六 十四 五 十一・十二 十一 十一 四・六・十一・十二 一・七・十一・十二 十三・十六・①九 七・八・十・十一・十二・ 一・二・三・四・六・ 九 十四 二十	十八・二十 二十 十四 九 一・二・三・四・六・ 七・八・十・十一・十二・ 一・二・三・四・六・ 九 十四 二十						

10	9	8	7	6		5	4	3	2	1	
おつ	おく	おきなさぶ	うれしぶ	うらむ		うらさぶ	うらごふ	う	あらぶ	あもる	上二段活用 語
興 於知 意知 於都流 落	起	於吉奈佐備	宇礼之備	怨	浦不怜	浦不樂	浦佐夫流	裏佐備	浦佐備	宇良佐備	裏戀
⑤ ⑬ ① ① ①	⑧ ① ①	① ① ①	② ① ①	② ① ①	① ① ①	① ① ①	① ① ①	① ① ① ① ① ①	② ② ① ① ① ①	① ① ① ①	① ① ① ① ①
八・十一・十三 十一・十二・十三 一・四・六・八・九 十四 十五 十五・十七・十九・二十 十一 十六・①九 十・十一・十二・十三・ 十八 十九 十一・①九 二 二 一 二 一 十九 十 十一 十一 四・十一 二 十三 二十 十九	卷										

『萬葉集』における動詞の表記

	17	16	15	14	13	12		11	
語	かむさぶ かみさぶ	かみさぶ	かなしぶ	おる	おゆ	おもひすぐ		おふ	
表記(用例数)	可牟佐備 可牟佐飛	可武佐備 可美佐夫流	可奈之備 可美佐夫流	下 下 下 下	耆 老 念(過) 思過 思(過)	於毛比須疑 思(過) 思(過)		生流 於布流 於布 於非 墮 墮	
卷	① ①	③ ①	① ①	② ① ① ①	① ⑤ ② ② ①	① ① ①		⑩ ⑤ ① ② ① ②	
	十七	五 五・十五・ <u>十六</u>	二十 二十	二・六 四	⑤・七・十一・十二 十六	三・四 三・十 十三	十一 十一・十二・十三 十七	八・十四・二十 二・三・四・十二・十六・ 十九	一・十 九 十四・十八

		25	24		23		22	21	20	19	18		
語		こふ こず			こぎたむ		くゆ くつ	ききこふ	かむぶ	かむしむ			
表記(用例数)	故飛	古非 許自 水手運	古非 許自 水手運		許伎多武流 榜多味 榜手向	悔 久由 久伊	朽 聞戀	神備 神之味	神古 神成 神左振	神左夫 神佐夫	神左夫 神左扶	神左備 神佐備	可牟佐夫流
卷	②	① ①	① ①	① ①	① ① ① ①	② ① ①	① ①	② ①	① ① ①	① ①	① ① ①	⑤ ⑥ ②	十五・十八 一・六・七・十六・ <u>十九</u>
	五	十四・十五・十七	十四・十五・十七・十八・十九・二十	十八・十九・二十	一 ⑥ ③・十一	四・十一 十四	十一	十・十七	十二	十一	七 八 四	三・十二	

『萬葉集』における動詞の表記

43	42	41	40	39	38	37	36	35																				
はなふ	ねぐ	にきぶ	なぐ	ともしぶ	とどむ	つく	ちりすぐ	たむ	語																			
鼻鳴	鼻火	祢疑	祢宜	親	柔備	丹杵火	奈具礼	奈具流	奈具	水葱	奈疑	名木	奈木	登母之夫流	登等美	等登尾	等々尾	等騰尾	壘	都奇	落(過)	落過	散過	知利須具流	知利須義	多未	建怒	
①	③	①	①	②	①	①	①	②	③	①	①	①	①	①	①	①	①	①	⑥	①	①	④	⑤	②	①	②	①	
十一	十一	二十	④	四・十三	一	③	十八	十七・十九	⑧・十五・十九	十一	十九	⑨	④	十七	⑨	五	五	五	二・六・八・十・十一	二十	十	八・九・十	八・九・十・十三	二十	五	⑩・十六	九	
																												卷

55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44																
わぶ	よろこぶる	よづ	よく	ゆきすぐ	やまさぶ	みやこぶ	みやこぶ	まう	ふ	ふ	ひきよず																
和備	歡	攀	与治	与久列	与久流	行過	往過	去過	由吉須疑	遊吉須宜	山佐備	美也備	都備	參	末爲	麻爲	噓	乾	干	非	飛	悲	引攀	引与治	比伎余治		
⑩	①	①	①	①	①	②	②	④	①	①	①	①	①	②	①	②	①	②	③	③	⑦	①	①	②	④	①	
④・⑩・⑪・十七	十	八	十九	⑨	十五	三・十二	三・七	二・三・十一・十二	十七	十四	一	五	三	四・六	十八	十八・二十	十一	二・四	九・十・十二	七・十・十二	三・七・十六	十五	五	十七・十八	八・十三・十九	九	十四
																											卷

58 57	56	語
をとめさぶ をとことさぶ	をつ	
遠等咩佐備 遠刀古佐備 越 變 變若 越知 遠知 和夫		表記(用例数)
① ① ① ① ① ① ① ① ① ①		
五 五 十三 三 六 四 五 五 十五		卷

6	5	4	3	2	1	上一段活用 語
とりみる	しばみる	こぎみる	きる	かへりみる	いる	
等里見 刀利美 數見 許藝廻 榜轉 榜廻 許藝廻 蒙 盖 (キル) 著 服 伎留 伎 眷 顧 還(見) 反見 反(見) 還見 可敞里見 可閉理美 射 射流						表記(用例数)
(ミ) ① ③ (レ) ① (レ) ① (ル) ① (ル) ① (ミ) ① (キ) ① (キ) ② (キル) ① (キ) ②② (キ) ①⑨ ① ⑨ (ミ) ① (ミ) ⑤ ① (ミ) ② (ミ) ② (ミ) ④ ① ① (ミ) ① ①						
十四 五 十 三 三 三 十九 十二 三 七 十一・十二・十六 二・三・四・七・十・ 十二・十三・十六 三・六・七・八・九・十・ 五 二十 ③・十四・十五・十七・ ①⑨ 九・十・十二 六 十三 七 一・二・七 二十 二十 一						卷

『萬葉集』における動詞の表記

11	10	9	8	7	
みる	ゆきみる	みる	みる	みる	語
爲流	爲 逝廻 往転留 看 視	見 見礼 見流 美例 弥礼 美礼 弥流 美流 羨	似 取見		表記(用例数)
②	⑮ ① ① ① ②	⑮ ① ① ① ① ① ① ① ② ⑤	⑦ ②		
十四 十八・二十	八 五・十四・十五・十七 三 十一 六・十九	⑮ ① ① ① ① ① ① ① ② ⑤ ⑦ ②	七・十 二・三・六・八・九・ 十六 三・七・八・十九 十・十六 五・十四・二十 五・十四・十七・十八 十七 二十 八・十・十五・十七・ 十九・十九・二十 一・三・六・十四・十五・ 十七・十八・十九・二十 一・二・三・四・六・七・ 八・九・十・十一・十二・ 十三・十六・十九 一・二・三・四・六・ 七・八・九・十・十一・ 十二・十三・十七・十八・ 十九	卷	

12		
みる		語
坐 坐 集 率 坐 居	坐 坐 集 率 坐 居	表記(用例数)
① ① ① ③ ① ⑥⑤	① ① ① ③ ① ⑥⑤	
四 七・十六・十九 十二 二・四・十一・十三 十・十一 十八 七 十三 三・四・七・十一・十二・ 十三 一・二・三・四・五・七・ 八・九・十・十一・十二・ 十三・十七・十八・十九	卷	

ラ行変格活用		1	あり
		語	
		表記(用例数)	
		巻	
安良	66	一・二・三・五・八・十四・十五・十七・十八・十九・二十	
阿良	11	五・八・十七・二十	
阿羅	2	五	
安里	28	三・五・十五・十七・二十	
安利	7	四・十四・十五・十七・十八・二十	
阿利	7	五	
安理	1	五	
阿里	1	十九	
安流	24	四・五・十五・十七・十八・十九・二十	
阿流	3	五・二十	
安留	2	九・十五	
安類	1	四	
阿留	1	五	
安礼	32	五・六・十四・十五・十七・十八・二十	
阿礼	8	四・五・十四・二十	
有	200	一・二・三・四・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十六・十九	
	103	一・二・三・四・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十六・十八・十九	

		4	3	2	
		けり			語
		かり			表記(用例数)
		いへをり			巻
來有	2	三・十二			
家礼	1	十七			
如是	1	四			
如此	1	四			
此有	2	十一			
如有	1	二			
可賀利	1	五			
可加良	2	五・十七			
家居	3	十・十九			
蟻	2	二・十			
荒	2	四・十二			
	21	四・十			
	12	十・十一・十三・十九			
	31	二・三・五・六・七・九・十・十一・十三・十九			
	37	二・三・四・五・七・十・十一・十二・十三・十六・十七・十八			
在	70	二・三・四・五・七・十・十一・十二・十三・十六・十七・十八・十九・二十			
	50	二・三・四・六・九・十・十一・十二・十三・十六・十九			

『萬葉集』における動詞の表記

8			7				6			5															
をり			しかり				こころあり			けり															
袁札	乎礼	遠留	呼留	乎流	乎里	乎浪	遠良	乎良	然	然有	志賀在	之可礼	之可礼	之可流	志可良	情有	意有	心在	心有	情有	服	著	著有	家流	
①	⑪	①	①	⑧	①	①	③	⑥	レ⑨	レ③	ル①	①	④	①	①	レ①	レ①	ル①	ラ②	レ①	ラ③	レ①	ル①	リ①	①
五	十五・十七・十九・二十	五	四	二十	十八	十七	五	十六	二・六・十・十二・十三・	二・七・十三	十二	十八	十五・十七・十八・十九	五	十四	七	四	八・十二	十三	一・四・十二	十三	六	十一	十五	
					八・十四・十五・十七			八・十四・十五・十七																	

サ行変格活用		語	表記(用例数)	巻
2	1	かたみす	難見爲 世	十二 ①
		す	勢	① ⑧・九・十四・十五・十七・十八・十九・二十
			西	② 五・七・八・十四・十五・十七・十八・十九・二十
			之	③ 十四・二十
			四	④ 一・三・四・七・九・十・十一・十二・十三・十四・十五・十七・十八・十九・二十
			思	⑤ 四・八・九・十四・十七・十九
			指	⑥ 四・十・十一・十四
			志	⑦ 五・十五・二十
			斯	⑧ 五
			師	⑨ 一
			詞	⑩ 十五
			須	⑪ 五・十四・十五・十七・二十
			周	⑫ 五
			須流	⑬ 五・十四・十五・十七・十九・二十
			須留	⑭ 十五
			須礼	⑮ 十四・十五・十八・二十
			爲流	⑯ 三・四・六・七・九・十

語		表記(用例数)	巻
4	3	にへす	十一・十二・十六・十九
		ほりす	① 四
		爲類	② 二
		爲留	③ 四・十一・十二・十六
		爲礼	④ 二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十六・十九
		爲	⑤ 一・二・三・四・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十六・十九
		シ	⑥ 一・二・三・四・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十六・十九
		ス	⑦ 一・二・三・四・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十六・十九
		スル	⑧ 二・三・四・六・七・九・十一・十二・十三
		スレ	⑨ 一・二・六・七・九・十・十一・十二・十三・十六
		摺	⑩ 四
		責	⑪ 四
		作	⑫ 七
		尔倍須	⑬ 十四
		保里勢	⑭ 十四
		保里之	⑮ 十八
		欲(世)	⑯ 八
		欲之	⑰ 一
		欲爲流	⑱ 六
		欲(爲流)	⑳ 六

『萬葉集』における動詞の表記

	語
欲(一)爲礼 欲爲(セ)④ (スル)① 欲(二)② (スル)① 欲(三)③	表記(用例数) 四・十一・十二 三・十一・十六 六 一・十一 三十一 三
	卷

	2	1	語
	く	ありく	力行変格活用
			表記(用例数)
許 阿里吉 己 故 伎 吉 枳 紀 久 久流 久留 久類 久礼 來流 來 (ク)②④ (キ)⑮ (コ)⑭	④⑤ ① ⑦ ② ⑥③ ③ ③ ① ②⑥ ②① ① ① ① ② ⑭ ⑮	十七 一・五・十四・十五・ 十六・十七・十八・十九・ 二十 五・十四・二十 十四・十六 三・十四・十五・十七・ 十八・十九・二十 五・十四・十五 五・十八・二十 二十 十四・十五・十八・二十 五・九・十四・十五・ 十七・十八・二十 五 一・二・三・四・六・七・ 八・九・十・十一・十二・ 十三・十四・十六・十七・ 十八・十九 一・二・三・四・五・六・ 七・八・九・十・十一・ 十二・十三・十六・十八・ 十九 一・四・七・九・十・	卷

4 3	語	表記(用例数)	卷
ゆきく まきく			
往來 行來 馬伎己 所來 緣 米 金 今			
⑦ ⑦ ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ①		(クル) ③⑨ (クル) ④⑦	十一・十二・十三・十六・ ①⑨ 一・二・三・四・六・七・ 九・十・十一・十二・ 十三・十六・①⑨ 一・二・三・四・六・七・ 八・九・十・十一・十三・ 十六

4 3 2 1	ナ行変格活用 語	表記(用例数)	卷
しぬ こぎぬ こひしぬ			
斯農 志奴 之奴 思仁 之尔 死奈 思奈 斯奈 之奈 戀死 孤悲死 古非之奈 己根尔 行 往 去 去流 行流 去奈 伊奴流 伊奴 伊仁 伊尔 伊奈			
① ① ③ ① ① ① ② ② ④ ④ ① ③ ① ① ② ③ ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ④ ⑤		⑦ ⑦ ③ ① ① ② ③ ③ ④ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿	五 五 十五・十七・十八 十五 十五 二 十四 五 十五・十七 四・十一 四 十五 二十 三・十二 九 四 十一・十二・十六 四・八・九・十・十二 十一 八 九 十四 五 十七 十四・十七・二十 一・五・十四・十七

『萬葉集』における動詞の表記

語	表記(用例数)	卷
思奴	①	十七
之祿	①	十五
死	⑩	一・四・十一・十二・十三・十六・ <u>十八</u>
	⑫	四・ <u>五</u> ・九・十一・十二・十六
	⑭	三・四・十・十一・十二・十六
	⑮	三
	⑯	十六
	⑰	四・十一
終	⑱	十二
指南	⑲	十二
二二火	⑳	十三

語	表記(用例数)	卷
いそふ	①	一
いふ	①	二
おもふ	②	三
伊蘇波久	①	四
言 <small>ハ</small> 雲	①	五
念 <small>ハ</small> 久	②	六
思 <small>ハ</small> 久	①	七
思 <small>ハ</small> 苦	①	八
隱良久	①	九
隱 <small>ハ</small> 久	①	十
隱 <small>ハ</small> 久	①	十一
加多良久	①	十二
語良久	①	十三
語良久	③	十四
飼 <small>ハ</small> 久	①	十五
還 <small>ハ</small> 久	①	十六
加欲波久	①	十七
聞 <small>ハ</small> 久	②	十八
晚 <small>ハ</small> 久	①	十九
之努波久	①	二十
斯努波久	①	二十一
知良久	①	二十二
遅良久	①	二十三
落 <small>ハ</small> 久	①	二十四
令盡 <small>ハ</small> 久	②	二十五
取 <small>ハ</small> 久	①	二十六
奈氣可久	①	二十七
嘆 <small>ハ</small> 久	①	二十八

動詞のク語法 (1~24は四段活用、25~31は下二段活用、32~34は上二段活用、35は上一段活用、36~37はラ変、38はカ変、39はサ変)

33 32	31 30	29 28 27	26	25	24 23 22 21 20	19 18 17 16	
こふ おゆ	ふく とく	つぐ たゆ くる	おもほゆ	ある	ゆるす ゆく みす まをす ます	ふる のむ のたぶ ぬらす	語
戀⑦良久 古布良久 老⑤落	深⑦良久 解⑦樂 告⑦樂	告⑦良久 都具良久 絶⑤樂 晚⑦⑦ 所思⑦君 所念⑦久 所念⑦國 所念良國 荒良久 荒樂苦			縦左久 由可久 御覽④⑦ 申④久 益良國 零⑦⑦ 落⑦久 零⑦久 能麻久 乃多婆久 沾④⑦	表記(用例数)	
⑧ ② ②	① ① ① ①	② ① ① ①	① ① ① ① ① ① ① ① ①	① ① ① ① ①	① ① ① ① ① ① ③ ① ① ① ① ① ①	① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ①	
十三・十六 四・七・十・十一・十二・ 十四	七 十一 十三 十三 十七	七 十二 十 三 三 十二 八 六			四 十四 六 十六 十 十・十二 十一 八 十七 二十 九	卷	

39	38	37	36	35	34	
すらく	く	をり	あり	みる	すぐ	語
爲良久	來⑦口 來良久 久良久 居⑦久	在⑦久 有⑦雲 阿良久	見⑦⑦ 見⑦九 見⑦久 見樂 見良久	過⑦良久 脊⑦⑦ 戀⑦⑦ 戀⑦⑦ 戀⑦⑦ 戀⑦⑦ 戀⑦⑦ 戀⑦⑦ 戀⑦落 戀⑦久 戀⑦苦 戀⑦國 戀⑦國	戀⑦良苦 戀⑦樂苦 戀⑦等九 戀⑦樂 戀⑦落 戀⑦久 戀⑦久 戀⑦苦 戀⑦國 戀⑦國	表記(用例数)
①	① ① ① ①	② ① ① ①	① ① ② ① ⑤	② ① ⑤ ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ①	⑥ ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ①	
八	十三 四 五	十一・十三 六 八	七 八 十・十一 六 六・七・八・十九	六・八 十一 四・十一・十二・十三 十二 十二 八 三・十一 十一 十一 十一 四・十・十一・十二	卷	

〔注記〕

- 一、原表記の示し方は、副詞や形容詞の場合と同様である。
- 二、複合サ変動詞、連用形名詞、活用不明語、敬語体などはとらなかつた。
また、たとえば、枕詞「玉かぎる」から復原されうる「かぎる」などの場合も表には挙げていない。